



小野

飛騨安政五石額

秋之部

月	初	后	文	初	銀	于	近	魂	鼻
名	月	月	月	秋	河	蘭	大	杉	系
月	々	々	々	々	々	盆	石	木	刀
見	三	十	葉	今	貸	々	近	杉	生
名	日	三	月	朝	少	々	鐘	種	牙
月	々	夜	々	の	種	々	石	刀	魂
々	々	々	々	秋	々	々	送	刀	刀
月	待	星	九	七	か	高	大	蓮	盆
見	宵	自	月	夕	き	灯	石	飯	刀
名	々	托	々	々	々	薙	魂	刀	盆
名	十	々	立	星	願	灯	々	世	刀
月	六	々	秋	今	の	薙	祭	々	刀
雨	々	々	々	宵	系	々	刀	世	刀
々	々	々	々	々	々	々	刀	々	刀

下目一





新酒	霞時雨	沙魚	岸築	紫山子	駒色	後彼岸	田新	野分	霞	秋風	西瓜
23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12
酒	雨	魚	築	子	色	岸	新	分		風	瓜
溜	漸	外	初	引	放	初	晚	早	三	牙	花
23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12
酒	寧	の	鮭	板	生	汐	稻	稻	り	入	火
23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12
長	新	形	新	落	活	ハ	新	落	二	置	張
夜	新	好	新	水	住	朔	米	穂	百	扇	暑
23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12
秋	夜	砧	落	浪	鳴	駒	穂	本	稻	初	角
23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12
の	夜		鮎	鮎	子	川	祭	穂	素	嵐	力
夜	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13

秋の香	柿	秋の電	木	菘	美	楚	ふ	花	野	野	葵
24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13
香	電	葉	槿	袴	裳	花	庵	野	葵	野	花
秋	ふ	秋	首	ま	秋	稻	蓮	桔	鬼	芦	葵
24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13
海	と	霧	の	ん	海	の	の	梗	灯	花	花
24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13
秋	梨	秋	草	我	萩	唐	蘭	芒	風	菊	菊
24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13
水	子	雨	花	木	萱	幸	22	21	仙	仙	仙
24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13
秋	若	秋	女	萩	萩	系	芭	紫	鶴	尾	尾
24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13
山	菘	の	郎	尾	萩	瓜	蕉	苑	頭	花	花
24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13

下目二











冬 朗詠 89	大晦日	丘見	追 灘 81	衣配 80	心、	冬 の 夜
	榮 善	春 待	年 本 熊	昔 の 夕	昔 の 夕	冬 の 田
	年 内 五 夜	年 取	年 忘	や く 拂	冬 の 拂	瑞 八
	除 夜	年 篇 82	年 の 年	年 の 市	年 の 市	鞍 橋

附録

不立山句 善光寺句

俳諧安政五百題 秋之部

俳諧居墨者輯

月

雪をたけなす山をてきて身く月夜  
 卓池  
 雪日の事ありぬら能く月  
 怨  
 との山を雪ふらうとくく月  
 旅家  
 抱の事ありく宵を覚ゆる月夜  
 旅家  
 目出たしと月もたれあすく月夜  
 大橋  
 心をぬく若竹年ひぬ月夜  
 素屋  
 おをむくうらこいよあまの月  
 双鳥  
 名もくもく聖日るく月夜  
 由緒



此と人の眼をり、あやも月を門  
 船をよむ志をりよ月を志くく月  
 上流つりと船をほふよ月を青  
 此の船をよむかと言ふ一月の言  
 るの中より船をよむ時て月を志  
 立出ると日の光れしや月を月  
 子を所つてよむところありとよ月  
 こころのそのくれもよむ月を志  
 月を志や二とよむと此を志  
 さり船をよむよむありてよむの月  
 よもひらりとよむ月を志よむ  
 夕月やよむを志を志下る山

悠平 富年 万二五 茂業 祖郷 杜虎 春二 鼻左 梅塵 目外 宗古

此の船をよむかと言ふ一月の言  
 るの中より船をよむ時て月を志  
 立出ると日の光れしや月を月  
 子を所つてよむところありとよ月  
 こころのそのくれもよむ月を志  
 月を志や二とよむと此を志  
 さり船をよむよむありてよむの月  
 よもひらりとよむ月を志よむ  
 夕月やよむを志を志下る山

可大 史玉 逸淵 海年 采木 菅丸 淇水 絳輝 蒼帆 梅家 叢

名月



神の降ふ所

名月ふ田毎おもこすくその法  
名月のうきふ入んけしひと  
名月やさこくそをたを禁座の軒  
名月の雪よも法もぬまの軒  
名月やえ法さぬいふ木めこ  
名月やあやうる光をむさまを  
名月やうさ歌のあはれむを  
名月やあしむあやうるを  
名月やあしむあやうるを  
名月やあしむあやうるを  
名月やあしむあやうるを

風鈴  
芳頼  
松竹  
可常  
釋無  
平山  
島毒  
巴休  
貞之  
波同  
田泉

名月やあしむあやうるを  
名月やあしむあやうるを  
名月やあしむあやうるを

柳園  
好詩

狭山の歌

名月やあしむあやうるを  
名月やあしむあやうるを  
名月やあしむあやうるを  
名月やあしむあやうるを  
名月やあしむあやうるを

伽祥  
山外  
一具  
蒼帆

月見

雪ころろ度おのく月見の  
むさうつこるそくふゆる月見が  
向ありくさく月見の那  
赤待のまきりなつて月見の

卓池  
沙路  
栲山  
雪堂



はらみゆすやうらもそぬ月んが  
心ゆくまうらあうく月んこま  
月を揺くくまのたの月んが  
一具 石外 蒼乳

名月百

月能るあうや雪森のふと心  
静う松の影を光くす面の月  
忘るうすおふはみするの月  
降ゆくそのうをさう雨の月  
常りうりし本うあ照るるの月  
何委やらふよいまお東てるの月  
暗あそさすうふんく雨の月  
一具 桐雨 松竹 正南 沓翠 越卯 桂山 蒼乳

初月

初月や萩少々秋くを桂ぬ弁  
孫りえうそくはあうり初月夜  
初月や雪るをさうりて門別  
初月の入くとんくそ桂のまを  
古つうや能初あうを初月夜  
友繁 樹石 多よ 卓良

こり月

見あをうや松木の葉ふこりの月  
こり月や門先掃くく人を居す  
こり月よ梅み葉さくむ白ひれ  
こり月やセツまうくあまを  
こり月や雪あうておむる花上  
極先みまうハぬ初るこりの月  
一具 卓池 一宵 江平 梅通 一具 蒼乳



待音

待音を待つるに秋の月影の影  
待音やとてとらふもく、秋の月  
心はくはる音やとて月を待  
待音中心さくや、庭歩り  
待音や風待せよ、一ちつら  
待音やせつとく引、帳の糸  
待音やとらふみよきる酒を白

梅家  
竜果  
将基  
雲雲  
可厚  
山海  
伽禪

十六夜

晴き月く於縁初もか、つら  
十六音ふととらふそく、木をさ  
十六音やあ、久きあ、さあ、あ

卓池  
若帆  
卓郎

十六音や秋のうら、あ、あ、あ  
十六音やあ、あ、あ、あ、あ、あ  
十六音やあ、あ、あ、あ、あ、あ  
十六音やあ、あ、あ、あ、あ、あ

大梅  
舎用  
多よ  
一具  
山外

後夜白

見とけさ、あ、あ、あ、あ、あ、あ  
映、あ、あ、あ、あ、あ、あ

鳳朗

耳、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ  
裏、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ  
落、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ

卓池  
春歌  
英山



いとていつく隣さぬもや後み月  
おとよ樹を遠く見られては月  
晴さうな若き侍りや後み月  
空を舞うく廣く、妙ありは月  
朝晴し、中、の空をりは月  
玉飾り、文、庵、さう、さう、也、后、の、月  
未、の、う、た、て、着、ね、て、見、て、守、後、み、月

十三夜

十二夜、夜、麻、さ、し、侍、族、の、あ、る、夜、の、月  
月の、只、み、侍、さ、や、う、な、ま、十、二、夜  
出、立、こ、の、終、て、陳、し、付、く、夜、ね、十、三、夜  
名、付、と、ま、り、さ、う、し、月、は、十、三、夜

菅 帆  
瓦 村  
其 山  
柳 園  
中 摺  
梅 家

具  
燕  
能 録  
碓 岩

星月夜

あら、海、や、雲、を、さ、う、さ、う、さ、か、り、月、夜  
連、保、を、連、し、ふ、人、事、お、し、月、夜

龍田姫

明、星、を、光、り、お、く、今、り、龍、田、姫  
見、ま、さ、く、世、経、り、さ、お、と、龍、田、姫

文月

あ、こ、月、や、味、り、香、る、る、京、の、あ  
あ、月、や、お、よ、い、入、て、う、ら、お、お、さ、う  
さ、こ、月、や、こ、さ、な、く、お、お、入、酒、り  
七、月、や、脚、を、舞、を、ま、し、る、魚、市  
ふ、こ、月、や、灯、の、照、う、ふ、た、さ、う、く

駄 岳  
畏 三

懐 子  
鳥 吟

梅 家  
柳 五  
善 宇  
長 城  
松 什



ふさ月や不三つをなぐねと雲田川  
ふさ月一う所もあまふ甲子な

一具  
中捨

葉月

萩をもち月を著る月夜光の那  
八月や五をそやく風ふりのあま  
八月や鐘のあうり也山おき

卓池  
嵐外  
き波

長月

長月の初らむりつこさなり  
そふふくくるはきふ之九月うぬ  
長月や源座てあうり吉野山

葉萩  
雲水  
西月

初秋

初秋や桂葉はたさうらねのま

桂家

初秋のそさうらりや雪一は  
初秋や昭もとくねりしうらり  
とら秋や峰はくりにハ雪に  
初秋や舟のとき新し海の上

大養  
西子  
整地  
中捨

今初秋

隣うら門とくねりて初秋  
萩こしふ葉の身やもさの秋  
桐の木の影をよきそやまの秋  
ふさ月のあけうこくまありと初秋  
きくやふさふさもさかや初秋  
出さ雪ハ山之もとりてと初秋  
明赤く備をありくと初秋

卓池  
岱年  
多よ  
抱像  
藁馬  
移里  
梅山



おもふことほろろ秋とて静か秋  
こゝらひい吐もあまふと静か秋  
森不更に東色とて静か秋

一止  
月外  
梅室

立秋

秋之や月夜とふれと人も来  
竹のふしし秋に立花の那  
秋之や船雲ふあつとて  
秋之や人知知のあつとて  
秋之やまき小つ秋一後り

若人  
子和  
婦半  
左良亮  
梅室

七夕

七夕や秋よりてとては事一  
七夕や一とては事一  
善田川

蒼乳  
山外

七夕やあつとては事一  
七夕や扇をろひとては事一  
七夕や風小なをろひとては事一  
七夕のほろり押一とては事一  
七夕やと孤に馬を品きとては事一  
七夕は事一とては事一

南こ  
月こ  
月外  
寿堂  
何丸  
梅室

星々霄

只一粒星をよとては事一  
尾の折ふふ事とては事一  
と星の別事とては事一  
宵ふ似ぬ光やとては事一  
明うとては事一

卓池  
柳紫  
静一  
紫堂  
而后



人皆の心をなやませしむるに

梅室

銀河

横所をなやませしむるに  
松風の流しをなやませしむるに  
濃うをなやませしむるに  
森をなやませしむるに  
うく見えて只静なり  
その川のまはりに  
その川のまはりに  
その川のまはりに  
その川のまはりに  
おまをなやませしむるに

蒼乳  
一具  
梅山  
雪頂  
松年  
可常  
三省  
速成  
快雅  
為山

秋ふねをなやませしむるに

御禪

流るるをなやませしむるに

中捨

天の川 見よとや

梅室

かー山神

かまをなやませしむるに  
雪井をなやませしむるに  
夕暮をなやませしむるに

茶禱  
一具  
西

静の橋

かまをなやませしむるに  
かまをなやませしむるに

畏  
西月

双鳥

かまをなやませしむるに

双鳥



星小糸以作事おささるるに後つひに

于共素之益

梅玄

名用とこ嶋の標所も掃とあり

舟池

うらふをちの舞うて血の酒の家

漸重

せはこい

せはくこいふやとせれつちふ佛の家

梅家

せつをまのやと案ふありにとる見

雲市

高灯籠

教山をぬきとる高灯籠

雲帆

梯の末をこゝめおもひに灯籠

多上

白鳥の舞や表ふひつて馬灯籠

仙鳥

夕雲のうらもしてとる燈籠のこゝる灯籠

木雲

をりたりた事アをとてらやう灯籠

梅家

灯籠

灯籠や鈴をのりたる仲 花雲

花雲

灯籠ふ歩りをとるはむおぼるる

西る

仲の所ふく

自をあり灯籠るりの生 雲

淨雲

人雲をまゝ言ふきれり灯籠が

雲宇

灯籠の法り場をこゝるるる

月外

灯籠や一石燈一人通り

壽寺

村上風をふくねるる灯籠が

伽禪

灯籠の名跡をとらるるおぼる

具

一おろく町をたはく灯籠のれ

中振



送火

むらさきの花を焚けてあり、庭の門  
をくぐりて、人下りききよ、先とすま  
まに、火や、煙、風、たて、人通り

正續

其國まうききこえさう也、正續  
こころを、心ふく、枝、花、正續

送火

おろろさや、附、木、云、ら、ま、れ、上  
送、火、や、志、さ、う、か、ま、き、人、道、り  
お、ろ、ろ、さ、や、庭、う、て、我、身、か、あ、の、道、り

魂祭

御符  
昔古  
梅言  
畏三  
花物  
卓沈  
蓮亭  
御符

嵐、音、を、呼、あ、き、名、上、魂、中、た、り  
う、く、風、を、送、入、さ、一、ま、也、魂、祭  
送、付、お、あ、い、ね、う、一、尺、や、魂、祭

魂祭

た、と、さ、ふ、の、音、川、よ、あ、る、花、う、る  
魂、祭、何、の、音、さ、う、さ、あ、る、魂  
第、一、不、魂、花、祭、灯、の、う、り、を、ま

柳経

柳、経、や、か、く、の、庭、ま、さ、又、了、人、り  
柳、経、を、あ、く、や、ら、く、あ、の、音

蓮の歌

是、う、さ、へ、上、の、下、の、あり、蓮、の、歌

確衆  
多し  
護物  
風、祭  
方、之、五  
山、外  
涼、花  
風、節  
御、符



たつふあらぬ道あり蓮花飯 蓮花

せつ鬼水

一ちがぶあしく押出やきこのき船 仇祥  
舟のきつさくあしはらぬあはは 確然

暮詣

まのつ詣松風もありにしちやま 疾剛  
暮詣もことさきさきさきさきさき 多よ  
まのつ系縁さきさきさきさきさき 有言

生気魂

くくむらぬひさもうれす生気魂 為山  
もまのつ梅さの月や生気魂 蓮如

盆花月

盆花月	卓池
盆花月	盛年
盆花月	中根
盆花月	持五
盆花月	雪里
盆花月	木橋
盆花月	兄森
盆花月	一具
盆花月	仰祥
盆花月	虚云
盆花月	梅室
盆花月	美帆



踊

時しころふをうりふあうおらうり  
なこころあそびてなうりやあそび踊  
志らぬうりやあそびになりし踊ふふ  
仕舞舞中々、思思あておと踊ふ  
おふしよのふもふあふふあふふ  
よくらえれて我ふあふふあふふ  
あふふあふふあふふあふふあふふ  
あふふあふふあふふあふふあふふ  
あふふあふふあふふあふふあふふ  
あふふあふふあふふあふふあふふ  
あふふあふふあふふあふふあふふ

卓池  
木景  
壽三  
桂山  
行砂  
湛紫  
礪山  
成年  
一こ  
抱像  
塞馬

時の中月あそびおたうりうり  
あそびの中あそびあそびあそび  
舞の口血あそびあそびあそび

西瓜

寺入のあそびあそびあそび西瓜  
うりあそびあそびあそび西瓜  
風見浦の上うりあそび西瓜  
ちさあそびあそびあそび西瓜  
持ふあそびあそびあそび西瓜  
西瓜あそびあそびあそび西瓜  
花火  
目おけあそびあそびあそび西瓜

幽縁  
崇光  
嵐介  
梅室  
素屋  
茶室  
丁加  
依祥  
中権  
松竹



ちかろくもつるひまのあふふたうれ  
 菖古  
 菖古  
 目め休む方のさくあふふたうれ  
 可大  
 言あふふたうれあふふたうれ  
 菖山  
 是の言を忘れたるふたうれ  
 升廣  
 湖の松のまをふたうれ  
 一朗  
 木山やみれをさくあふふたうれ  
 菖村  
 後に松をさくあふふたうれ  
 氷壺  
 さくあふふたうれあふふたうれ  
 仰經  
 是の人の目まさくあふふたうれ  
 梅宮  
 菖古  
 菖古

砂 暑

菖古の目まさくあふふたうれ  
 五 彦  
 是の人の目まさくあふふたうれ  
 多 彦  
 大菖古の目まさくあふふたうれ  
 一 雅  
 是の人の目まさくあふふたうれ  
 仰 經

角 力

おりやとらそふたうれ  
 卓 池  
 川 ぬくやとらそふたうれ  
 野 巢  
 是の人の目まさくあふふたうれ  
 古 武 良  
 是の人の目まさくあふふたうれ  
 一 光  
 是の人の目まさくあふふたうれ  
 心 星  
 是の人の目まさくあふふたうれ  
 星 城  
 是の人の目まさくあふふたうれ  
 風 頭



秋風

夏の毛ふ小秋風たちぬ山秋家  
また一人り坂をあるや秋の風  
多味常の法よのせもや秋の風  
たそ、うつくはふ光あり秋の風  
秋風よとやく別りて山落る  
ふをこころ秋ふれり秋の風  
秋風や穉よをぬり秋の風  
うらまゝ居る人ふえふや秋の風  
あふふ秋と其本どふくや秋の風  
田畑の外こそ黄もむや秋の風  
人のまゝに居るものきよや秋の風

阜池 河路 経る 波文 波路 直志 梅山 貴清 一具 中推

夕小入

夕小入や東所の秋の葉り風  
おもてくちやるもあふ大板の風

之願く金

くわつらとつりふりもふとそつる金  
秋の葉の多形と人々居りて  
扇あて、りる人々一山ふり

初嵐

海老あふの折つるもそつる初嵐  
あふの初嵐の初嵐の初嵐  
ものひらつら初嵐の初嵐  
相切やを東居るも初嵐

碧山 以言 清風 御祭 多よ 素居 海年 清翠 雀史



むらさきのうさしのみを初嵐  
初嵐のうさしのみを初嵐

関市 洪音

霧

空を霞やもをせし曇る降の打  
りふれる自阮んと家とをり起す  
散るきてたふし路もやそを霧  
霞の射や降りいふ打のも  
空を霞よこふくし家やをれ上  
夕を霞ふまきし社入もり不二の経  
空を霞も又はめて居れそくこ相  
橋やのふ初らそすありそを霞  
余やと身てりまきこ出すも霞の系

東比 木山 松竹 素屋 里者 風谷 浪吉 木本 大峯

ささしと初を霞也とを霞の中  
空を霞一も明しはむまの中  
あくと戻りもく人そありそを霞  
ぬれをくくく戻れおむそを霞

西山 さ波 橋室 中橋

雲

川さりや葉吹こふす村書  
さーとて丸さりありやを霞の中  
きさで戯る人ま酒をたぬの那  
初さりやゆ々北のらるる風  
初さりや類をたたりそを霞  
初さりややいそくさ合す初集る  
初さりやを霞ふまき山を霞

一具 古乙 嵐平 一京 其秋 升る 黒る



桑のむらも軍ありさるの平  
川さやき知あつるやあつれ  
さうきくもやふんくさあお新

行所  
沙路  
清齋

二百十口

二五十七のちりそ星おひうりうれ  
く少ふありて忘能一二百十口こを

言子  
少聖

稲妻

稲妻や隠れさやまー持お大  
稲妻は中流を舟の昇あり  
稲妻やこねあふさる釣魚  
稲妻は社多めく降る時の余る  
ゆくく思ふ又稲妻のいりぬぬ

京池  
泉左  
茂推  
後物  
謝子

稲妻やゆきりおふさうらふ  
稲妻や目えさるる海と山  
稲妻やゆきうあてとるの秋  
稲妻はあつをさあーふのゆり  
稲妻は麻うらまをさる目山  
稲妻やいはれさるる庭を夢  
稲妻はあふあふく海くさうらふ

一兆  
中宮  
龍昇  
之系  
小池  
一具  
振堂

稲妻

稲妻の人をあふさる此か  
稲妻はゆきうらまをさる目山  
稲妻は麻うらまをさる目山  
稲妻はあつをさあーふのゆり  
稲妻はあふあふく海くさうらふ

卓池  
大梅  
中推  
風歌



早稲

この香もあつてあつてあつて  
早稲もあつてあつてあつて  
古里や空の連歩り 早稲の中  
早稲の香や馬を替へて酒  
早稲もあつてあつてあつて

後穂

後穂もあつてあつてあつて  
人後もあつてあつてあつて  
この香もあつてあつてあつて

も穂

後穂もあつてあつてあつて

後穂もあつてあつてあつて

田新

又もあつてあつてあつて  
お田新のたつてあつてあつて

晚稲

山もあつてあつてあつて  
日傘もあつてあつてあつて

新米

新米やあつてあつてあつて  
新米もあつてあつてあつて

後穂

後穂もあつてあつてあつて

山外

志後

後穂

早稲

後穂

早稲

後穂

早稲

後穂

早稲

後穂

山外

志後

後穂

早稲

後穂

早稲

後穂

早稲

後穂

早稲

後穂

早稲

後穂



よふふとよふふとよふふとよふふとよふふと

涼花

初夜

初夜に木下に出るも十歩ほど  
初夜に木下に出るも十歩ほど

汎翠 唯岩

二編

八節や海月の出たるも樹をりり  
八節や海月の出たるも樹をりり  
八節や山家の冬を思ひに返り  
八節や山家の冬を思ひに返り  
八節や木下にあひたるも菴の香  
八節や木下にあひたるも菴の香

卓也 御経 栴山 五夜

駒引

駒引や路のふもとに  
駒引や路のふもとに

中推 丈左

駒近

駒近に形を細きるり  
駒近に形を細きるり  
中くよつてもよつても  
中くよつてもよつても  
駒近に形を細きるり  
駒近に形を細きるり

風齋 多吟

枝生し雲を移りて思ひに  
枝生し雲を移りて思ひに  
来りて人なつてきぬや駒近  
来りて人なつてきぬや駒近  
匠付る角力ふもよぬ駒近  
匠付る角力ふもよぬ駒近

中推 色淵 一具

清廷家

清廷かまはくもさきほ  
清廷かまはくもさきほ  
さむしんか舎いともす清廷  
さむしんか舎いともす清廷  
鳴子

風動 泊遠

一川あささや鳴子の十とつ

卓池



くろみよ能おとすりつるふの那  
つ子川人よ月能あつらねたり  
風おやくくくくくもやつる子  
門もつ子道をねくくくく川  
菘のあつら向そつるくも申つる子

素山子

風たを能あつらとくくくく  
あつら川くくくく能あつら  
画くく本もそりつるのさくく  
くくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくく  
備思くくくくくくくくく

ふ竹  
菘所  
柳圃  
中控  
梅室

古池  
山外  
志後  
木我  
伽祥

るくくくくくくくくくく  
事所能あつら明たをねくく  
田中知くくくくくくくく

曳板

心をく月るくくくく  
山方くくくくくくく  
川板くくくくくくく

菘山

小池くくくく山向能あつら水  
おまをくくくくくくく  
くくくくく川くくくくく  
おまをくくの周くくくく水

後室  
一具  
呉誠

後柳  
一具  
中控

柳得  
芥余  
菘山  
古池



片之方く口船をさるる舟一具  
人よりかき不用し舟を舟一具  
さひ船

舟押ふ舟をさるる舟の根を舟  
いくふ舟の根をさるる舟の根を

舟の葉

葉をさるる舟の葉を舟  
舟をさるる舟の葉を舟

舟船

舟船をさるる舟の葉を舟  
舟船をさるる舟の葉を舟

舟船

舟船をさるる舟の葉を舟  
舟船をさるる舟の葉を舟

舟船

舟船をさるる舟の葉を舟  
舟船をさるる舟の葉を舟

舟船

舟船をさるる舟の葉を舟  
舟船をさるる舟の葉を舟



外の市

甲や畑おのりありそり外の市  
町中くおく持くくー市お外

一具  
中推

新おとは

新おとや小義をうやておの家  
市へおくちさうふふりねと年とこ  
新おとや布おお遠ま輝遠

對山  
山海  
一具

結

村口小入とらーんおきぬさうな  
一うおおひさうおえおぬの耶  
清海屋おひらうおひくぬのや  
大晴お遠さくぬさうり梅うら

草丸  
山外  
呼牛  
鳥呼

そのつふもる人ありさうおぬ  
魚入ん能く常おかお並や小おぬ  
さうさうおてふお持てはおおぬ  
遠いのおお常おぬふくおぬ  
魚とさぬるおもーさうさぬ  
おとさうさぬお孫てさくおぬ

る山  
月夜  
竹雨  
月分  
西言  
中推

利根川

さあしおおお聞へささぬ  
りゆけささぬさうさうや灯とぬ

伽福  
梅言

露時雨

おとさうおお果ハーさうさ前う  
坂口や木のらえさーさのさおさぬ

乙良  
石菜



や、さき

や、さきおむしりも第ふりうりた  
たは仕舞火繩や取ぬ良きこ  
や、さきや横さ事こころのうらさ

中拾  
ト早  
一具

新さき

新さきや豆斎をむら山新町  
新さきや鶴さおの付一激強網  
新さきや塩の志りおさうり  
新さきやん下も家さき山の上  
新さきやさめたり一さ清茶子

卓池  
杜  
生  
碧陸  
梅室

新さき

新さきや松のうりりさ新さきハ

卓池

山とさきふりうり山とさき新さきハ  
陽のたさきさき新さきハ  
取のつさきやおさきお枕元  
新さきハ取ぬや新さきの井原  
床のつさきおさきさきおさきハ  
新さきさきおさきさきおさきハ  
よさきさきさきおさきさきおさきハ

波  
双  
柙圃  
枕  
中  
梅室  
茗

新酒

こさきさき新酒をむや二人連  
さきさきさきさきさき新酒系  
老さきさきさき早さきさき酒  
一さきさきさきさき新酒ハ

西  
而  
山  
茗



にらり酒

と初らるや外をうき衣を小高  
にらりてき花よみ葉よ酒の味

長夜

さびしんふと秋をのいむそお  
待まじし曉成さお永う那  
長おをえのうと人おお孫ふ  
ゆけりとゆお孫る春永う那  
月の外とゆお孫る春永う那

秋の夜

秋の夜と衣をうき葉を小高  
にらりてき花よみ葉よ酒の味

秋の夜

秋の夜と衣をうき葉を小高  
にらりてき花よみ葉よ酒の味

お寄るは衣をうき葉を小高  
にらりてき花よみ葉よ酒の味

うけむし人暮るし秋の夜  
にらりてき花よみ葉よ酒の味

八奈  
野秋

風外

秋成

武日

月外

中操

葉帆

衣頂

堀  
西馬

卓池

喜山

秋山

墨

旭

葉帆

不深



秋の海

暮らさるやうに暮らさるにぬれぬ海  
竹のとさる家とさる家とさる家とさる家と

秀外  
拙依

秋の山

日こり入るも自りうきすに秋の山  
水  
湖と出で流るる秋の山  
意の所をみるもあらう秋の山

卓池  
蓬陽  
風郎

秋の山

秋の山とさる山とさる山とさる山と  
りしむいてくもさる山とさる山と  
おちるりも一雨さすや秋の山  
今とくも秋の山

八奈  
碧濤  
雨竹  
仙操

秋

家根くもさる山とさる山とさる山と  
庭柿やさる山とさる山とさる山と  
清所柿やさる山とさる山とさる山と

雨境  
有月  
雅哉

ふとら

りあつりくもさる山とさる山とさる山と  
年と秋もさる山とさる山とさる山と

小栢  
一松

梨子

ありさる山とさる山とさる山とさる山と  
柳の葉もさる山とさる山とさる山と

梅雪  
淡香

菅草

破くもさる山とさる山とさる山とさる山と

夏山



丹晴るむもつちぬやうあつと

秋の風

一りそわくもーとあつ秋の風

昔川やまろさきうけ秋の風

秋の葉

秋の葉おほくやうあつをこわす

とちうくもーとあつ秋の葉

秋の鳥

あつ秋の鳥けいんや秋の鳥

秋の鳥おほくやうあつをこわす

月代おほくやうあつをこわす

晴るよは秋の鳥けいんや秋の鳥

る山

昔川

照く

あつ

あつ

あつ

あつ

あつ

あつ

あつ

あつ

あつ秋の鳥けいんや秋の鳥

あつ秋の鳥けいんや秋の鳥

一葉

あつ秋の鳥けいんや秋の鳥

あつ秋の鳥けいんや秋の鳥

あつ秋の鳥けいんや秋の鳥

あつ秋の鳥けいんや秋の鳥

あつ秋の鳥けいんや秋の鳥

あつ秋の鳥けいんや秋の鳥

あつ秋の鳥けいんや秋の鳥

あつ秋の鳥けいんや秋の鳥

月之

鳥左

鳥池

鳥年

鳥馬

鳥揚

鳥格

鳥祥

鳥終

鳥通



明入り予は小原を過る一葉ありの那  
 相まてく待てくちある一葉あり  
 井より落る、釣瓶ふあつて一葉あり  
 花帰らば移りてゆくさ下をうり相一葉  
 等宗よりくちや一葉あり後の相  
 志塔  
 映門

散柳

落るをみては月あり月や散柳  
 花まらるりよふ事のとくあす散柳  
 散るをのるあらしはくく柳うれ  
 散る止く日るさのもくく柳うれ  
 さいしよふ事をとくねをちく柳  
 映門ありあくと散るなりちく柳  
 山外  
 一之  
 里考  
 梅通  
 妙語  
 映門

草花

文政五年心よりとくもやまありふ  
 ともまらるり野より人も居り州の春  
 温泉とありと落合川やまの春  
 山外  
 万山

伊賀古く塚

花はよりやはるるるさねのまの屯  
 孫里たりくくく林もあし一葉あり  
 梅言  
 万古

女郎

明くくくくあねるす老ぬ女郎ふ  
 りよふいしよふ屋をさくちやめはるふ  
 女あり花はふみをうりにみゆるうれ  
 梅をよくくく風ももくくくあめはる  
 卓池  
 中推  
 天池  
 丁知



水のふくみぬを思ふなり 女郎を  
藤原の御子も能く御事なり 女郎を  
アノ女も一も能く御事なり 女郎を  
以てふんも能く御事なり 女郎を  
原中や少ね一本なり 女郎を  
あつたなり 女郎を

本様

出るりも申さく 女郎を  
おろちふも申さく 女郎を  
枝もと 女郎を  
女郎を  
女郎を

有帝  
桂琳  
石外  
柿園  
途程  
梅室

卓池  
柿室  
西馬  
枝山  
例程

葛の糸

葛の糸や聖りく 女郎を  
糸のつるも小雨を 女郎を  
我本香

涼阴  
石山

枝も小も申さく 女郎を  
枝も小も申さく 女郎を  
女郎を  
女郎を  
女郎を

薙尾草

薙尾草や夏も出 女郎を  
女郎を

一具  
二丘



巻終

古きと書きたるもくあつらふ友とて  
花もくくあつらふ白ひやふちとて

清史

中推

芳珠沙花

この日のとあいらうもせんゆき  
樹もくと秋風をいもくしよんゆき

一具

凶年

川量

うらやうるをふらんす見遠ひる  
わらうや海山さきふはひみゆき  
新葉もく枯葉の付てふらんゆき  
うらやうらたさうみほひみゆき

梅香

可大

中推

芳史

新之助

おとよみふもよるるよ新之助  
おとよみの聖とみれくこけし思ふゆき  
おとよみとあさきまはまふ葉のふに  
おとよみの海おとよりと一まきりれ  
おとよみとくくくくくくくくくく  
おとよみの昇ふもくくくくくく  
おとよみやあまのくくくくくく  
おとよみやあまのくくくくくく  
おとよみやあまのくくくくくく  
おとよみやあまのくくくくくく  
おとよみやあまのくくくくくく  
おとよみやあまのくくくくくく  
おとよみやあまのくくくくくく

中推

山外

志南

藤原

一具

中推

一具

中推

暑休

西島

中推

梅香



芙蓉

旧脱ひよるるのあり芙蓉は  
市より花かた能くふきまきまの  
枝あふはるるひそちあふはるる

林海棠

生植ふりそよあふり  
ふささのあふりたのあふり

萩

こぼるるあふりふらふらふのあ  
人あふりて定るるふのさあふり  
風あふりて不たてふらふらふのあ  
高あふりてあふりてあふりてあふり

海

花

池

中

多

阜

梅

可

馬

ふらふ萩人ことまてしらく

拂除くるとあふりてあふりてあふり

ささあふりふらふあふりてあふり

ふらふあふりハふらふりてあふり

こぼるるあふりてあふりてあふり

枝こふあふりてあふりてあふり

萩

日者りてあふりてあふりてあふり

門あふりてあふりてあふりてあふり

りあふりてあふりてあふりてあふり

風あふりてあふりてあふりてあふり

古代やあふりてあふりてあふり

字

高

山

山

梅

其

原

市

保

松

梅



楚とくおのる

日如とくけきを定しそくの  
かこもを酒のまやれそく  
おとくおのるこくくくく  
さひーとておりある  
おのるをといくくく

福の巻

少るーてまらしまれぬ  
思ふ人よみられそく  
もようまらそくおのる  
おのるまらそくおのる  
福の巻をまらそく

確  
可  
格  
記  
地

格

順

竹

竹

竹

酒の巻

苗のそくおのる  
福の巻をまらそく

唐の巻

是のそくおのる  
そらまらそくおのる  
そらまらそくおのる  
そらまらそくおのる  
そらまらそくおのる

系

布字よまらそく

風

池

格

格

格

格

格

格

格







海屋の又えく遠行の所  
意はのれくく戻りて  
来りたる所やるふり

桔梗

新あともはく桔梗は  
咲きてもろとれも  
花のよき桔梗ふふふ

薄

一所は道付し  
ふふふふふふふ  
ふふふふふふふ  
ふふふふふふふ

仙  
花  
山

年  
池  
山

仙  
花  
山

雪一はふくり  
梅も通とぬ  
東てし我れやまぬ  
ふんはく来く  
一寸志し  
おれるものも  
海一ゆめり  
忘れく  
所書や

源

ふれはは是ら

西

海

一

麦

曲

友

本

海

風

原















こんりそらひの月さそ衣梅とさ  
あり

ぬつよ

掛より能筆を能筆にぬつよ  
氷毒

中をこしとすふらへるぬつよ  
密里

務死と、りてうらほをぬつよ  
柳圃

芋

塙のちりてまると出させる山芋  
密年

芋畑の死をいへるまるとさりて  
立宇

芋の死をいへるまるとさりて  
一具

百引菜

ふふの木の葉と葉の葉をいへる  
確衆

百引菜や赤こそ死にぬつよ  
一具

粟新

あまかりや一ははらうま  
保如

粟のくまや其の用のくま  
隆衆

本榊

本榊の四つは榊や葉  
一具

本榊や榊のうのくま  
戸頼

木のくま

いとくまをさるまは榊に榊  
中務

本榊のくまをさるまは榊に榊  
如月

本榊のくまをさるまは榊に榊  
る方

本榊のくまをさるまは榊に榊  
念

榊平のくまをさるまは榊に榊  
西山



團栗

法まろきとん栗初るふ山後

忠  
畏之

懐み響

中ふちろの田ふたなる振れさる

万  
籟

上野さる

法正響み人よこ居る振のさる

書  
史

草

名もろろく其木のきある草ころろ  
さるあふれれおとよけくさるち  
ゆさるるや草れれれ今もろく

丁  
知

松草

松もろや字を待たれ草ころこひ  
松もろや市ふん初くさるり月

雪  
頂

草特

草ころろや一人り初るるさるれと  
草れれれやたのりゆのそくさるのゆ  
草ころろふりてさるるりゆり  
草ころろれ言をえとや草特  
草ころろやさるるる人とも知らぬ山

草  
特

栗

ふもろくそ風をいのちや栗特し  
栗栗やさるれと踏をぬれれれ  
栗栗とれをさるらふもろや栗の色

不  
正







多々入る程多くはもみらくふ  
物ころりる小寺のそとちうれ  
大勝 草紙

草紙

みそとまをみそとまをみそとま  
引ころりる大相もくくまみそ  
うにみそとまあーの市やまみそ  
夕景みそとまあーの市やまみそ  
あひりみそとまあーの市やまみそ

龍騰

竜騰やむも小雲とまあーの市  
就騰やむも小雲とまあーの市  
小雲とまあーの市やまみそ  
木雲 色淵

むー

むーうくむむうーからある程立  
まふれやまふれむむむく色の中  
中の中まふれむむむの中まふれ  
こーの中まふれむむむの中まふれ  
むー関みそとまあーの市やまみそ  
むー関みそとまあーの市やまみそ  
まふれやむむむむむむむむむ  
まふれやむむむむむむむむむ  
法度やまふれむむむむむむむ  
風鈴やまふれむむむむむむむ  
まふれやむむむむむむむむむ



あり集るおをぬるまての歌  
あり秋さや一もあふじし秋歌  
むしや言ふ少くもてはし

仙符  
一具  
梅之

軽削啼

紙とをく重なるしし軽削啼  
このあふる人秋音やみくも

小圃  
一具

秋歌解

秋歌とてその名しし一もに冬  
着るもの指ささるし秋歌とみ  
啼ささるるふまあり秋歌解  
り秋落て啼やとるるし秋のそ  
ま色秋あるとるるるし秋歌解

京池  
里存  
茶亭  
土角  
茶丸

秋の蝶

身の上の秋とそ若らすし蝶う那  
樹のつゆあきてとまれり秋歌解  
海よりカモありや秋歌蝶

秋景

追ふ事ふるふしうし秋のをうり  
町中や秋のふくも秋歌くも

古堂  
雅歌

秋帽

人中て生れとやうふ秋歌帽  
後身ふ拂ひあふくも秋歌帽  
一ッ片くるるともつんし秋の帽  
何とそくさうくさうぬ秋の帽

梅家  
海年  
三秋  
大橋



秋叙

秋の叙や移り下まじりすつた  
秋の叙ふさしく味口掃除るれ

風即  
半湖

義中

みのむしや取入て年々おと  
みのむしお音も風情あつた

茶新  
未華

晴吟

とんかろおと流ししりぬ洗ひ  
晴吟おとらおとくもく雲うれ  
晴返もあし晴吟の力う那  
とんかろやもかしのをる物もの  
おと流しをるおととんかろ

卓池  
多上  
卓良  
夏秀  
杵圃

とんかろやもかしのをる物もの  
とんかろやもかしのをる物もの

梅室

きりく

り終ふささひまを来てきりく  
燃しさる本屋をのううきりく  
ひまを焚く茶ともしきりく  
ゆめうら我が家のまをさるひま  
茶室おとをさるひまをさるひま  
茶室おとをさるひまをさるひま  
おとをさるひまをさるひま

茶丸  
法室  
杜陵  
後見  
山子  
而后  
卓堂

曉更

きりくささやゆめおとと

抱儀



おろくをまゝにたててもななくもりくもた  
をく通しつらふあたをふやありくす  
とりくすゆをたれも月をたふを  
とりくす森余る老のまくらをた  
望みえりりお出のねやまありくす  
はくをたて

とくをたの函してゆわねたふく宛  
灯ともたてた尾をくくもり  
寤馬  
庭掃をたてあしつふく  
灯ともたてた尾をたてつ  
物をもたてた尾をたてつ

鳳形  
箕山  
畏三  
一具  
卓比  
湯之  
畏三  
梅通  
畏左  
可大

情願

情願やうのふたつともまもる  
情願やうのふたつともまもる  
情願やうのふたつともまもる  
情願やうのふたつともまもる  
情願やうのふたつともまもる

道よりそえん思ひあふたつともまもる  
うらたても風をまもる  
あまの泥をまもる  
十里り船をまもる  
野あまをまもる

梅室  
而右  
一具  
中持  
梅通  
流禰  
湯之  
田舎  
梅之  
中持



調

かたさうしやとく死灰りお舞袖形  
ひくくしやおねを啼かせおまひを  
蝉しつしせみむらりしとまりにを  
かきらしやまひのそり秋より新

海を

世無うき秋とさくをを涙を  
待ころをを二こりるををさうり  
いはまをさくあくをを秋をを  
道ころををさく入るををわをを  
様まをを君て来をを多海を  
しををあををくををはをを海を

一具  
抱  
扇  
炉  
庭

若  
中  
眉  
氷  
木  
之

森を出てさくををぬををり  
まををまををまををわををり

馬

深山後や通りくくりお馬をを  
馬啼や空を風情を馬啼くくり  
馬啼や馬先のまをを馬啼くくり  
馬啼くくり馬のまをを馬啼くくり  
馬啼くくり馬のまをを馬啼くくり  
馬啼くくり馬のまをを馬啼くくり  
馬啼くくり馬のまをを馬啼くくり  
馬啼くくり馬のまをを馬啼くくり  
馬啼くくり馬のまをを馬啼くくり  
馬啼くくり馬のまをを馬啼くくり

伽  
梅  
家

卓  
山  
里  
麦  
下  
不  
京  
茶  
梅



待と一もを多能と嬉し一厚み  
初厚おまふ能と所へ下りふ今里  
まふ厚ふ一あしいこや西りけ  
代年 伽羅 草丸

稲雀

稲雀ま深とあわと毛眼いし  
ふきまんら一相とあらし稲雀  
一田片ふるふ進たわて稲雀  
俵 柴人 俵

鶺鴒

とされいやまみく之目し松法より  
赤世や鶺鴒終る尾より掃い  
謀物 百古

鶺鴒

まふれりらよ子本とまらぬ鶺鴒  
中権

いそよめはは中と多極小鶺鴒一相  
出りいそよめみおあや鶺鴒の  
籬うや中みりよしやむしらや鶺鴒  
鶺鴒とや西りらるるよ一具

椋鳥

椋鳥や青ふ一あお大新告  
椋鳥まらや西りあしり山  
椋鳥のをささちりも片くるあ  
大椋 可合 風

木つこさ

木つこさふ松と本とふ上  
木つこさあ来松く洪し下  
木つこさの言や松とく風  
木 雉 中権



鶉

月ふらら志らむいりや啼鶉  
山の事やひねりたりと啼鶉  
いり所や知ぬるをいり啼鶉  
いりふを枯るも早し啼鶉  
入ぬを待たふ里や啼鶉

言を帰

甲子下陰子もともいり  
乙子下陰子もともいり

鶉

帰りの事ふらむいり  
まよふる世をまよふるの鶉

信齋

鶉村

我走

中野

梅室

大梅

中野

卓池

素屋

鳥をまよふる世をまよふるの鶉

鳥をまよふる世をまよふるの鶉

鳥をまよふる世をまよふるの鶉

鳥をまよふる世をまよふるの鶉

鳥をまよふる世をまよふるの鶉

鳥をまよふる世をまよふるの鶉

鳥をまよふる世をまよふるの鶉

いよふ

いよふああれいよふあ  
いよふああれいよふあ

鷹山別

名跡ふら風をたふ山別

建市

奇三

鳥大

可大

生大

精大

骨大

中野

鳥

鳥



秋の風ふき渡る左の塘の隅

漢物

旭吹

しらぬやわらわらしきそとく人か歌  
くもぬきぬかへもまをば横のうを

古歌  
松

麻笛

ふく風やまふねとらぬ月お出  
麻笛もほひりりりれたる西東

風  
氷苔

麻

麻はよもいれぬあふおのふおろし  
麻をくやんては山もむくく  
夕山をりよまをるく麻の  
野あらしや禁あらし麻の

原池  
山外  
古歌  
東

麻のややややや  
おはぬきや若のふはや麻の  
まをこめてんはや竹先やまの麻  
おろし人か竹竹のりりり麻  
まのまをふははるありぬるの麻  
宵月山麻のうもや麻の  
まをよ麻らぬぬ言や麻の  
まからぬぬぬぬぬぬや麻の  
麻のややややややややの  
麻のまをくはやまをく  
まをまをくはやまをく

東山  
富年  
桐漁  
桂山  
法令  
まを  
松園  
芦川  
石山  
一具  
中松  
大松







秋朗詠

おみゆふのたつたけや秋あけ  
ゆきふりくさる秋歩りや毛見の  
ものむしに海さうりふ山字月影  
秋のゆく所のふりあけの  
さひーはさのふのほやをむ  
秋涼ーほきりそ烟りそ  
市中に秋影をふりあけむ  
その尾末

詠  
葉  
物  
草  
中  
抱  
不  
行

湖清安政五百歌

冬の一部

湖清居墨書輯

初雪

初雪や人跡をさす  
初雪や田圃の山  
初雪やふりそる  
初雪や上りて  
初雪やふりそる  
初雪やふりそる  
初雪やふりそる  
初雪やふりそる

梅  
一  
松  
菫  
川  
風  
一  
雪  
花



雪

一松とありし人あり遠きそさるる山  
まき山やさきのそえんゆる雪の中  
降降りてさらふ田をたう一魚もれり  
まきとありしゆるりあゆりしきの人  
見て床に寝てまきまきあやまの光  
物とまきしゆるりまきあやまの光  
まきまきや一足はゆるりまきまき  
足はまきまきゆるりあやまの光  
まきまきゆるりあやまの光  
何まきまきまきまきまきまき  
人まきまきまきまきまきまき

年池 鳥池 一具 色洲 壽山 春秀 石名 春末 柳圃 若少 龍昇

美しやまきまきまきまきまき  
一松とありし人あり遠きそさるる山  
まき山やさきのそえんゆる雪の中  
降降りてさらふ田をたう一魚もれり  
まきとありしゆるりあゆりしきの人  
見て床に寝てまきまきあやまの光  
物とまきしゆるりまきあやまの光  
まきまきや一足はゆるりまきまき  
足はまきまきゆるりあやまの光  
まきまきゆるりあやまの光  
何まきまきまきまきまきまき  
人まきまきまきまきまきまき

叢 礎岩 考柳 物土 氷蓋 立守 雪老 采郡 抱後 和合 采海 昇左



此のまきやまをあらまに降はした  
ちるまき、傍に杉やまをまき  
又道にまき、出まやまをまき  
いふまき、ふまきをまき、  
まき、まき、まき、まき、

吹雪

新築の屋へ風を揚はつはるまき  
まき、まき、まき、まき、  
まき、まき、まき、まき、

志中のまき

まき、まき、まき、まき、  
まき、まき、まき、まき、

而居

芦川

一具

枕椽

まき

大橋

西三

名山

三幸

古きまき

初時雨

日影さし、降や降甘まき、  
不意に降、降、降、降、  
降、降、降、降、  
降、降、降、降、  
降、降、降、降、  
降、降、降、降、

時雨

降、降、降、降、  
降、降、降、降、  
降、降、降、降、  
降、降、降、降、

京池

長成

裏竹

里孝

柳堂

一具

梅堂

京池

西三

松竹



時多り 海や山松花移りけり  
松花や時多り 葉のし 尾をさす  
ぬれて我時多り 花あとも松花は  
山松花枝ふこころ 時多り 那  
西山や時多りの中 松花の能く  
けり 悔し 心をや 時多り 花  
本花のあて 朱の西へ 時多り  
沖中を時多り 岬の 花  
向やうし 時多り 舟花布  
吹そ 花の移り 花のし 花  
時多り 花の 葉と 花  
松花の 花の 時多り 花

一 身  
山外  
松花  
一 保  
山月  
松花  
松花  
松花  
松花

時多り 海や山松花移りけり  
松花や時多り 葉のし 尾をさす  
ぬれて我時多り 花あとも松花は  
山松花枝ふこころ 時多り 那  
西山や時多りの中 松花の能く  
けり 悔し 心をや 時多り 花  
本花のあて 朱の西へ 時多り  
沖中を時多り 岬の 花  
向やうし 時多り 舟花布  
吹そ 花の移り 花のし 花  
時多り 花の 葉と 花  
松花の 花の 時多り 花

本松  
月外  
一 清  
松花  
菊居  
必山  
而後  
吳城  
松花  
松花  
松花  
松花



みねのま

松の葉をふりたすくくともみれば  
去るゆくゆく出でてみるに松の  
止むを中へふんをくおし入るま

袋年  
竹面  
一長

宿一初田う宿跡うへにまのる  
ま志らぬまきしおたりやまのる

惟そ  
後色

あら社

此社末の雪うま言あるにわれは  
降るるとぬきまふあうまうれ  
桜へあう芥うまうまぬく  
あさめきまうまにうまうるまうれ

美帆  
悠平  
栞露  
舎用

あう社まきまに鳴山の鳴きやう那

あ池

おお柱

岩角也けうまうはくしも  
まふはう社たあうけりまお柱

西馬  
崇寺

おお

おおまきしお柱まきの給ひけこ  
神そりてまきしお柱まきけり  
床心うまうて起たりまおのまお  
まのまおあまうまきまのまき  
まのまおのまおまきしおあま  
まのまおのまおのまおまきし  
おしもやまおあまうまのまお

あ池  
あ山  
あ山  
中柱  
あ后  
本柱  
陽春







常くお小舟あつりし小瀬市  
庭橋ふく風をまきむ山をくれ  
ゆき去てはしりをはきすおそく  
清きこゝ田舎もこゝ小舟こゝ那  
歩けぬぬやういふおれおれおれ  
おの在れ尾上に一團ふおれおれ

師走

夏柳お上りしおれおれおれ  
柔そあくや師走おれおれの市  
縁もききおれおれおれの月おれ  
おれおれ  
上か茂くふと柔りく原をくむおれ

梅道  
西店  
士明  
白堂  
二丘  
山介

東池  
克明  
御祥  
おれおれ

男のしづかおれおれおれおれ

おれおれ

何とせよおれおれおれおれ  
明後此きこふおれおれおれ  
風音おれおれおれおれ

おれおれ

一るおれおれおれおれ  
おれおれおれおれおれ  
おれおれおれおれおれ

おれおれ

魁一おれおれおれおれ  
おれおれおれおれおれ

中橋

一  
能  
深

柳  
山  
送

梅  
新



夷傳

順流うき船を吹やまひを傳  
子傳も言はれうらこ急ひし傳  
舟さして隙ふ明かり夷傳  
舟を龍をあつたまをるや夷傳  
子伝

卓池  
徳山  
一具  
中旗

子平伝りよふあり高や松の舟  
子平つりや星美し上言はれそ

崇山  
畏之

明華伝

小舟風や明華伝の産舗伝  
志ちくくや明華伝は舟掃傳

為山  
舟走

神楽

星よてらおの舟をむ神楽の舟  
此里を言はし傳之り神楽の舟

卓池  
波路

甲之神楽

又人よりも傳はれ多し甲之神楽  
明星を言はし傳之り甲之神楽  
十拍

徳山  
二丘

星あつて神楽九年毎ふ十拍伝  
とあ紙ふ伝む十拍伝ふそこそ  
くらか正にそきもの言はし十拍伝  
星こもれ言はし十拍伝ふそこそ  
又るもの言はし十拍伝の言はし  
と一自傳を言はし十拍伝

叢  
多し  
呉城  
徳山  
汎雲  
相海



達摩忌

達摩忌や園中にある五日月

中橋

四山子

法命儀

菜大和をも新ぬ回向や法命儀  
ありて、誠に入ぬ法命儀

中池

中橋

芭蕉忌

さびしきおう法里初よは松尾ふ  
まのたなや菊の忌のたなまきひ  
とやとてくふふもひてく時ふか

中池

菊園

伽羅

法衣裁

衣ふ角より裁ひそつ裁てはとり裁

中橋

一志不也るお中一の法衣こ  
み紗りて嫁入るおしや法衣に

心屋

具

法佛名

本願まふる毛時るの法佛名  
佛名やまゝうておくよつては

多上

一具

新たき

新たきよあおみまて老ふより  
あかつきや梅して通る新たき  
さる系よりあはれを御さる  
星のもる傘さしてはらるる  
ねるころやおおつちたふ  
度雪のころより出づる新たき

中池

菜香

柳園

梅園

五山

芳札



三尊念佛

入観て果鴨好町やてる念佛  
下駄をひて名歩らるる念佛  
裏町を二人り好く持て念佛

一具  
芭丸  
細符

大師海

海あはれ不所まると能去大師海  
九丈塔あつてまうた寺は大師海

一具  
透測

落葉

影能くみえておりの落葉の乳  
干傘を少すららるる落葉の  
隠持さるる歩の落葉の  
こられりを隠よとらふ落葉の

京池  
山外  
而后  
柳圃

はむ落葉のこもるに能く  
踏つりし音好おふさき落葉の  
言ふ落葉のこもるに能く  
庚りし音好おふさき落葉の  
幸中好おふさき落葉の  
夕風やまの影くもる落葉の  
舟て見るとそのくもる落葉の  
江をたへし落葉の  
鶴好おふさき落葉の

木の葉

木の葉をひいて  
うららら木の葉の落てあつて

卓池  
杉竹







熊五塚

木枯や相沖をきて、まゝるゝと兵と  
る下りては、木枯みづゝみだり那

枯柳

ふ雪もあけくゝと枯りたゝまゝり  
柳のうとこくくくふと木枯にたり  
木多あゝみ枯えりや、か枯柳  
果ふもせぬ門の枯も枯りし色  
そとらよ老木とふ枯て枯柳

散り葉

まぬみ多葉を葉にらたつる日、あふれ  
ふ多葉をらるゝ事や、枯れ上あふみ

柳 塚  
五 塚

若 札  
清 風  
而 后  
柳 塚  
中 塚

若 札  
平 塚

散り葉をみらつて又、あつてのまゝにまゝ

帰 家

深山あふれをまゝとを枯て歸む  
月もつる古葉をまゝとを歸む  
歸むもあつて、まゝとを歸む  
一飛とと音と、まゝとを歸む  
心ゆた、まゝとを歸む  
歸むもあつて、まゝとを歸む  
一柳を枯れまゝとを歸む  
持人、まゝとを歸む  
まゝとを歸む、まゝとを歸む  
二人り、まゝとを歸む

中 塚

松 塚  
山 外  
露 泉  
号 城  
心 星  
若 札  
鐵 印  
柳 塚  
若 山  
松 竹







冬栂

生身形をこころす此や冬栂を  
あつてこころす栂あつて冬栂を  
嘆きやてり冬栂を冬栂を栂

栂山  
栂山  
栂山

冬牡丹

冬牡丹の栂風栂ぬ冬牡丹  
あつて冬牡丹あつて冬牡丹  
冬牡丹冬牡丹冬牡丹冬牡丹

冬牡丹  
冬牡丹  
冬牡丹

冬仙

冬仙や冬仙冬仙冬仙冬仙  
冬仙や冬仙冬仙冬仙冬仙  
冬仙や冬仙冬仙冬仙冬仙

冬仙  
冬仙  
冬仙

冬仙や冬仙冬仙冬仙冬仙

冬仙

冬仙や冬仙冬仙冬仙冬仙

冬仙

冬仙や冬仙冬仙冬仙冬仙

冬仙

冬仙や冬仙冬仙冬仙冬仙

冬仙

冬仙や冬仙冬仙冬仙冬仙

冬仙

冬仙や冬仙冬仙冬仙冬仙

冬仙

冬仙や冬仙冬仙冬仙冬仙

冬仙

冬仙や冬仙冬仙冬仙冬仙

冬仙

栂尾

海山冬風栂尾冬栂尾冬栂尾  
栂尾冬栂尾冬栂尾冬栂尾  
栂尾冬栂尾冬栂尾冬栂尾

栂尾  
栂尾  
栂尾



枯屋を雨にさらしけりしものてふ  
ふししく能く艶ましくぬるや枯屋は  
とて枯る鶴鶴をさぐる尾をう那  
松尾を志をさるし枯る尾をう那  
時をの移る能くさるうさる、さるさる  
明きわたせけりしけりしけりし枯屋を  
一志ありし細りてはやうけりし

いさよのそ

いさよのそをのさしてけりしけりし  
いさよのそやさるけりしけりし  
いさよのそをのさるけりしけりし  
いさよのそやさるけりしけりし

世嘉 杵毒 素尾 小浜 依藤 山 中務 梅家 幸彦 味牛 竹砂

いさよのそやさるけりしけりし  
いさよのそをのさるけりしけりし  
いさよのそやさるけりしけりし  
いさよのそをのさるけりしけりし

いさよのそ

いさよのそをのさるけりしけりし  
いさよのそやさるけりしけりし  
いさよのそをのさるけりしけりし  
いさよのそやさるけりしけりし  
いさよのそをのさるけりしけりし  
いさよのそやさるけりしけりし  
いさよのそをのさるけりしけりし  
いさよのそやさるけりしけりし

中務 梅家 幸彦 味牛 竹砂 依藤 山 小浜 素尾 杵毒 世嘉



石路名

石路名の付く上り下り  
軒と此や石ちりくとも  
是らぬりを海のさくとも

粘り

こころをいふうきく  
粘りしや石路さくとも  
粘りしや一ちりくとも

粘り

粘りしや機具原  
粘りしや片もて出さ  
粘りしや曲りくとも

唯花  
み山  
多上

石月  
竹百  
西馬

東池  
喜屋  
新界

粘りしや月影らるる

粘り

粘りしや時をよも  
粘りしや時をよも

粘り

粘りしや秋をよも  
粘りしや風をよも

粘り

粘りしや川をよも  
粘りしや川をよも

粘り

粘りしや川をよも

乙良

今

三

山

山

山

山

山







葱

押さるる垣をすゑ葱の那

芭九  
惟子

麦時

麦を下や家うけをさ海の上  
山う帯や麦まき一人う家一  
麦耐や入りう赤き一人う  
少細や麦耐ふらう高吐  
麦耐や仔細入りうあうを

ね什  
高居  
東年  
細輝  
梅通

鶺鴒

曉をさる耳えやみそさう  
麦家や何をとるあてううう

五終  
麦系

事つらうう形極らそやみそさう  
たてこま秋も初屋う掃つみま  
りつやせをまきして仕をうこそま

喜池  
業  
伽祥

ふん

自曳てあら極色るうまう那  
屋を只いしうはあまのうをま  
ふをううて屋をう上うら能  
うをうま海や早う能うくら  
うてうまあうまのううま  
家着う屋をううううう  
一十ねう能うもうううう  
やうう能う所並あううう

京池  
範成  
漢如  
美如  
行如  
宮如  
就如  
松什



高き一木はうへて返すくみそをな  
流る方へ出てこく月影をさうれ  
木影をふむもさうあらう一鳴るを  
まら福小樹をたをさうふねをさ  
鳴り山むよね一ねいりもさうれ  
川上を柳もさうこさう鳴るをさ  
一物はくくもさうねし船をさ  
返すを柳もさうこさう鳴るをさ  
風を流してさうねねさうこさう那  
さうさうりさこさう鳴るをさ  
砂山やさうもさうをさう鳴るを  
海鳴る止了つらさう鳴るを

越年  
仇隙  
雁岩  
梅雪  
風  
草丸  
杜水  
涼心  
飯  
柳圃  
木新  
中

並松をこみねたてを鳴るをさう那

水鳥

さうさうねもふも流るぬふ二日月  
さうさうを流るさうらとねもさう  
水もさうねね流るぬふさうその流  
さうさう也さうさうりさうさういさうふり  
さうさう也さうさうりさう池を寺ね道

鴨

一ッ流るあくとねさう也さうね鴨  
鴨鳴りや鞠を流るんて下る坂  
流る流るや流るら皆立小鴨さ  
鴨鳴りや心をさうりさうさう鳴り

山外  
苔丸  
梔  
大恒  
素屋  
京池  
鳥  
西  
梅山



おえ下屋下小田そ氷るや鴨のそ  
一 松什  
一 具

をー

をーをそ樹うらうらや川畑り  
をーをそんーをーや畑ををそんー  
りそつそそ色いそらう映る色  
をーをそ二相作らううて以嵐る  
を鴨をををををーを映り色  
一 松什  
一 具

本兔

本兔の集るやあ鏡の枝  
本兔の面のみーうきそこを  
あらうううう樹よ本兔の相映り  
一 松什  
一 具

浮麻糸

中中やををううそ掛た夕明り  
樹糸ををををううそ掛た夕明り  
をもりの世信ーを中や浮麻糸  
をを糸繩  
一 松什  
一 具

夜

うの中不ーを映らぬたうの松糸  
実出ーをーをううううそ掛た夕明り  
をををてううううをををををを  
夜先糸とーうぬ糸やーをををを  
一 松什  
一 具



たの物

たのりや影よ伊の海をあらう  
物たり先や鷹の場をいたの時  
ぬくめき

うまうまふくもあふぬくめき  
物まよふまよふまよふまよふ  
西

お鳥引

お鳥引風よふらお鳥引  
お鳥引風よふらお鳥引

鯨突

としくお鳥引風よふらお鳥引  
お鳥引風よふらお鳥引

あーんせ

あーんせあーんせあーんせ  
あーんせあーんせあーんせ  
あーんせあーんせあーんせ  
あーんせあーんせあーんせ  
あーんせあーんせあーんせ  
あーんせあーんせあーんせ  
あーんせあーんせあーんせ

柴漬

柴漬をよあまの竹うたお鳥引  
柴漬をよあまの竹うたお鳥引  
柴漬をよあまの竹うたお鳥引  
柴漬をよあまの竹うたお鳥引  
柴漬をよあまの竹うたお鳥引  
柴漬をよあまの竹うたお鳥引  
柴漬をよあまの竹うたお鳥引

生海嵐

生海嵐お鳥引風よふらお鳥引  
生海嵐お鳥引風よふらお鳥引  
生海嵐お鳥引風よふらお鳥引  
生海嵐お鳥引風よふらお鳥引  
生海嵐お鳥引風よふらお鳥引  
生海嵐お鳥引風よふらお鳥引  
生海嵐お鳥引風よふらお鳥引







のち乾干ぬり帳とをそとてうふ  
用とありてを仕なるとし 終し  
居たりて後見うへる事この都  
言能本よ遠台みえへーさうな  
りあり 能あを引いりてさうれ  
竹をさうもてさう 佛具の光り  
定心とあり ちうさうえん四  
尚もさう 蘇蘇の中北口のちり  
葉舎

梅室  
秀何  
竹扇  
碧流  
而後  
葛古  
雄岩  
葉机  
卓池  
活高  
心星

横うらまの呼吸収束するを美と  
冬 露  
白ひよき 延し さうりさうり  
所ういゝく 他メもやまを  
ねのけうらつてさう さうさう  
誰の身し 誰の身もやまを  
意解るす 相りさうのちさう  
冬 露 冬 露 冬 露 冬 露  
猫 爪 山 出 け け け け  
起つよ 採く一 葉やまを

梅室  
卓池  
活高  
心星  
西馬  
二丘  
藉高  
北銀  
越印  
伽禪  
卓池

山とやいづくはをそとてさうり

着 固







巨燧

二二り先置掃きまゝこつこつ那  
火の勢をたおすにあらぬ巨燧は  
烟料の色のまてとりまゝ巨燧は  
場をえててまゝこつこつ巨燧  
出さぬとてまゝこつこつ巨燧は

埋火

埋火やふゆふゆ似たり雨の音  
埋火をききてもあらぬ埋火の音

火桶

こゝろくま火桶ははらわぬ

多也

芥舎

杜凌

柳橋

梅室

中野

多也

西后

多也

床のまゝは上をきこくを桶の耶

床のまゝは老ぬ火桶はつとふり

床のまゝは我をくはむや抱き桶

心とまゝはその不別ありてり火桶

院川舟中

院川のまゝはふくく火桶のね

火桶

火桶のまゝはふくく火桶のね

陽燄

ふくく火桶のまゝはふくく火桶のね

林曹

具左

月彦

縁庵

松隣

中野

梅室

乙良

一具



やうに名の清名に事ありん不うを  
西三  
妹のよくとる事ん事ありん不うを  
伽羅

殊不う

見よはくむかひしうりあを殊不う  
畏三  
心とまをすうとちとるや殊不う  
伽羅

を梅

そらも細さる事抄やまをのまを  
山分  
うと描あさすしとまて人やる  
一具

炉開

ろの事や言より西々志あまは山  
確畏  
炉開の雑子をまふ事しつを  
山分  
手あするふ時不炉とて天ふふ  
一具

は切

は切やうらうらうはんかきしう角の垣  
葉枝  
は切やうらうらうはんかきしう角の垣  
葉枝

言精

物あをうらうらうはんかきしう角の垣  
葉枝  
葉あをうらうらうはんかきしう角の垣  
葉枝

事始

梅柳の清名を先こころとて  
一具  
こころ細先田の神よ物とて  
山

敷置

ふみ並や物みこととてそそ方てから  
夢陽



寝たふに梅を見さそくふまうれ 一具

袴着

とふあまをや教へてはさぬあま 杖山  
とふうをそや初心よ感さる眉 梅宮

凍

とふ芽の一すを伸て凍ふあま 中村  
とふきらぬり小珠はるや帯さる 一具

氷

さひ陽をそく 海を氷なる 舟池  
氷るおや松竹をさける 山外  
梅た蘭をうけまつまや 高后  
所中くたふ事 五玉

てふ梅ははるをさる 多上

梅とさむやうにけを氷る 万條

梅あな中ふそをさる 大夏

とふ人もあふさる 鳥津

大波を岩よりさる 中村

系とさむやうにけを氷る 中村

自の介もあふさる 北鯨

布紐所をさる

とふらうくよ志をさる 梅宮  
おたふさる 梅宮  
おたふさる 梅宮  
おたふさる 梅宮







炭竈

土をひききりて炭を焼くといふ年の盡  
炭はうまき道筋ねくく木の葉をか  
一峰人よりあるを炭くあり

丁未

管をこし一明く明くをく火の  
炭は書やねくくえを留まら  
この書は書初より一やわら  
炭はく平意打るをくくく  
炭はく木と銀の軒をくく  
炭はく考や深山心ふくく

一具  
松山  
清史

土池  
炭舟  
多小  
去秀  
秀何  
等哉

冬尾末

年一炭中深山はくくく  
炭はく考やあり一や一よ

炭 煮

くをひききりて掃てくく  
炭煮よく人をくきりく

冬尾末

土をひききりて掃てくく  
くは風よねくくくく  
くはくくくくくく  
くはくくくくくく  
くはくくくくくく  
くはくくくくくく

深山  
石山

一具  
御経

土池  
松竹  
菅帆  
金盤  
呂風







冬のり

善てうら所掃言や冬り如  
冬たりや新米生菓一をう

冬の開

冬に新米針失ふてお替へし  
冬の開や小用少しも冬に入

冬田

一年にれいおあめり冬田の  
かこらわたりふえう秋一冬田

備ハ

備ハや山をくくくくおお  
備ハや山へお秋を未別下り

卓池

暮心

梅家

由指

落毛

確炭

山方

脛

眠みあ一喜生や早とちり  
人のらやよもやとたかあうり

林山

脛

ひおるやそもくたふおひ  
ひやまお馬をよおお物も智

道具

新米

新米のやあもくくぬを遠て  
新米のや門を船を新たさとき

石山

くわきよき新米の通す  
新米のゆきとと福をこら

中指

庚りよき夫婦南たうり  
新米の

佛指







元掛

元掛の酒造りや片やかく掛  
隣の土風物もさうさうや片やかく掛

年一お市

四掛おふきおたけの音や年お市  
おもとよふ世おとるもこのや年の市  
隣のらも片やかく掛や年お市  
似て人やさうさうのさあや年お市  
おとりの市や年お市  
何買ぬおとらぬや年お市  
人おとるおとらぬや年お市  
年の市おとらぬや年お市

西山  
他山

東池

月庭

成春

片掛

月外

波西

双飛

他山

一掛おとらぬや年お市

おとりの市や年お市

道一懸

此の道一懸も掛ふや火打石  
とさうさうの道一懸も掛ふや火打石

年一本懸

夕山やさうさうの道一懸も掛ふや火打石  
あつさうさうの道一懸も掛ふや火打石

年一忘

此の道一懸も掛ふや火打石  
あつさうさうの道一懸も掛ふや火打石  
不二又ゆふ二階を持ふや火打石

中掛

掛玉

風鈴

清高

西三

多下

東池

風鈴

西三



り年

りくや嬉しと批祀其言の形  
り年の治踏て方々踏つ形  
り年や七うさうり其星田川  
其年

丘見

隣子と系明るおろみの戻りか  
何咎ぬおやておやりおうんれ  
一具

ま結

一りけくうんやまお結るえ  
るく結やそまうのまきまら  
一具

年丸

平之松おりの交て年お山田お新  
其丸

人言お上うまやと一りお  
真山

年結

来るおおおととそふんや年結  
着るおこそ正と作うとくも也  
中書

大崎り

鯛うと一鯛屋お竹や大崎り  
以作たりおまの徳少や大崎り  
多し

明る方お色くても一と大崎り  
一具

お魚や梅のこお結一と大崎り  
一具

りおおまもとや一おま一と大崎り  
一具

甲和ら名

くおおりもお新あまうりぬ甲和ら名  
与池



てきたその尋ありと一に其を  
掃くこととちりし一は何や年の暮  
めはら——くさるはさかたり年の暮  
うらぐくと年暮るをさるに張る位  
子貞  
春  
而山  
風

年内三喜

まををたして年としこり  
きりつらそ掃むさんや年暮白  
多竹  
梅

除夜

除夜は夜を言をうり年暮り  
年暮らうり人ふれもや除夜は夜  
このしやとら除夜とありふり  
柳ありふり年暮るは除夜のしよき  
池  
而  
中  
暮

除夜は灯も考のをやせうたり  
梅

夕夕朗詠

暮枯て浮世をよき——尾はる  
ては梅もりはたはたは風の平  
と新入はたよめ切ありをさし  
意をたす年暮りのもありはは  
市場のらはたはたはたはたは  
柳ありふり年暮るは除夜のしよき  
柳

不毛山

海道了ら皆ふいとそり不毛の山  
余所へ散る事よもええは不二の山  
頂新志んをたをそり不毛の山  
池  
風



山くをふささかりふを不ある山 一具  
 妻好くも不二をく侍して多きなり  
 ちれ鼻よ付て也るやき侍た不二  
 年明て實も、つらう不ある山  
 善光寺  
 ぬ、の侍とやおとせぬをその月  
 月侍一標もる多き殿のちう候已  
 何社のかんしりや定りあんと我を  
 此國より産れ、さしうしうしんは  
 たり、侍を申あむ侍侍佛のし  
 哉とく、市中、虎と閑管まあり  
 性活め  
 年哉や或る百通に善光寺  
 流芝 卓池 確岩 中推 一具

江戸下谷御成道青雲堂英文藏版俳書目録

俳諧一葉集

前後編 全九冊

芭蕉翁後句附合文章 善光寺御則  
 善光寺御則集

俳諧故人五百題

全二冊

掌中故人五百題

撰本 全一冊

續故人五百題 一具庵撰

全二冊

發句五百題 白雄房撰

全二冊

新五百題 山喜庵撰

全二冊

新々五百題 同撰

全二冊

近世五百題 笠庵鳥吟撰

全二冊



嘉永五百題 愛川撰

全二冊

今人五百題 東溟撰

全二冊

續今人五百題 梅本為山撰

全二冊

同 三篇 今撰

全四冊

安政五百題 非釋居墨芳撰

全二冊

群玉集 小纂庵兩撰

全四冊

十萬發句集 洞海今撰 一具卷終

全四冊

發句類集 八采園撰

全二冊

名所千題集 四喜庵撰

全三冊

今人百家類題 過日庵撰

全二冊

近世十家類題 過日庵撰

全二冊

近世名家類題 全撰

全四冊

題林發句集 由誓撰

全四冊

安政附合集 半青居新甫撰

全一冊

海內人名錄 惺庵西馬撰

全二冊

今七部集

全一冊

利根太郎 了知撰 水石乃夜 撰撰

一、二、三 沙鷗撰 長善堂 修撰

いふり炭 蒼虬撰 茂本 庚年撰

粟梓 小圃撰











一 夢と云ふはたさるやうな事と云ふは病の起る  
る数万人用ひしるのみくま功のなるものなり  
不忠誠の妙業と云ふは功なき事なり

一 十載十年當息

一 勢利の難

一 肺の咳

一 心らとま

一 喉の詰り

一 小使の病

一 痰のつらみ

一 痰の吐き

一 痰の乾き

一 痰の止り

一 動のつらみ

一 小使の病

一 肺の病

一 肺の病

一 面飲しては

一 肺の病

一 肺の病

一 肺の病

一 肺の病

一 肺の病

一 肺の病

一 肺の病

一 肺の病

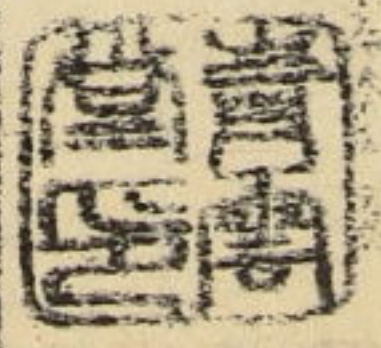
一 肺の病



江戸下谷御成道  
 御用 御書物所  
 青雲堂英文藏製衣  
 江戸下谷御成道  
 御用 御書物所  
 青雲堂英文藏製衣

東叡山

御用 御書物所



江戸下谷御成道  
御用 御書物所

東京

書屋

日本橋南三丁目	須原屋茂兵衛
二丁目	山城屋佐兵衛
所	小林新兵衛
神明前	和泉屋吉兵衛
所	岡田屋嘉七
横山町三丁目	和泉屋金右衛門
横山町三丁目	須原屋伊八
下谷御成道	英屋文藏
下谷御成道	福田屋勝藏
下谷御成道	屋平七



